発行日2024年 3月 15日

＊イフパット だより＊

～農民参加なくして農業なし～

第34号

櫻井文海会長、西村美彦理事にベトナム教育訓練省から
教育功労章が贈られる（写真１　本文P2）

目次

・P ２　櫻井文海会長、西村美彦理事にベトナム教育訓練省から
教育功労章が贈られる　監事　狩野　良昭
・P ２　ベトナム国教育訓練省の教育功労章の受章に思いを込めて　理事　西村　美彦
・P ４　私と教育訓練省大臣授与教育功労賞　会長　櫻井　文海
写真（P6　ソンラ市、ボー村、プロジェクト活動？点描）
・P ７　着任のご挨拶　事務局長　石上　俊雄

NPO法人 国際農民参加型技術ネットワーク
NPO-IFPaT International Farmers Participation Technical Net-work

櫻井文海会長、西村美彦理事にベトナム教育訓練省から教育功労章が贈られる

監事　　狩野　良昭

2023年12月、ソンラ省に所在するタイバック大学の発展に櫻井会長と西村理事の二人が貢献したことをが評価され、ベトナム教育訓練省教育功労賞の授与されその授賞式が行われました（表紙の写真１参照）。

この賞はベトナムの教育訓練関係に貢献した人に与えられるもので、日本人での受賞者は少ないようです。西村は2011年からJICAの技術協力プロジェクト「持続可能な農村開発のためのタイバック大学機能強化」のリーダーとして、タイバック大学の創設時から農林学部のスタッフ、施設の整備強化に関わりました。帰国後、タイバック大学の地域貢献の取り組みを図るため、2015年から所属する私どもNPO法人IFPaTの会長の櫻井らとともに、笠間市と連携しJICAの草の根技術協力事業を実施しました。

この草の根プロジェクトでは、大学教官が２村の農業生産の向上と所得向上のため農村に足を運び、地域に根付いた大学教育の改善強化に貢献しました。また2021年からは、草の根技術協力事業「中山間地域の少数民族農村におけるアグリツーリズムを導入した生計向上モデル事業」に取り組み、ソンラ省政府と笠間市の連携の輪に、タイバック大学の今までの協力の知見を組み込ませています。仮校舎のバラックからスタートした初期の頃からタイバック大学の発展に寄り添い、今やベトナム北部でも有数な総合大学に変貌を遂げた礎になっていることを、高く評価されたことによるものと思われます。

ベトナム国教育訓練省の教育功労章の受章に思いを込めて

理事　西村美彦

まずはこの章（バッジ）を授与されたことに関係者、関係機関の方々に感謝を申し上げたいと思います。

教育功労章はベトナムの教育分野の発展に寄与した人に与えられる章であるということです。今回の

受章の背景には公私にわたり、ベトナム北西部の高等教育を担うために2001年3月にソンラ省に新設された国立タイバック大学の強化支援に携り、大学の理念である教育、研究、（社会）貢献活動に寄与したものであると思っております。

タイバック大学は少数民族の多いベトナム北西地域の若者に対する高等教育を行う目的で新設されたものです。北中央地域にあったタイウェン大学をモデルに設立されました。この設立にはこの地域ソンラ省に既存していた北西部師範学校や高等農林専門学校などを統合して設立されたものです。

このような背景のなか、当時のJICAベトナム事務所がこの大学に対する支援を打ち出しました。当時はハノイ農業大学のプロジェクト協力をしていました九州大学を中心に宮崎大学、名古屋大学が加わり３大学連合でタイバック大学に対する強化支援を行うことになったわけです。プロジェクト名は「持続可能な農村開発のためのタイバック大学機能強化プロジェクト」として農林学部の機能強化が対象となりました。ただ、ソンラ省に位置するタイバック大学は外国人にとっては非常に協力しづらい環境にありました。一つにはアクセスの悪さです。ソンラ市はハノイから西北西300kmの山道を車で走らなければならず、８時間を要しました。当初は道が悪く雨期には崖崩れが多く発生し、交通止めとなることもしばしばでした。第二に言葉の問題です。地方ですので英語を話せる人は大学の中でも１，２の先生しかいませんでした。したがって通訳を介しての仕事となりました。（現在は多くの先生が英語を話せるようになりま

した。）第三として施設の悪さでした。それでも2010年には総合大学としての新校舎がソンラ市に建設されました。それまで農林学部はソンラ市から30km離れた山岳地のタンチャウ郡にありました（旧高等農林専門学校）。したがって車がないと動けない状態で、モーターバイクが唯一の交通手段でした。

写真３．TBUの旧農林学部キャンパス、講義室棟

このような状況でJICA専門家としてアドバイザー（リーダー）、調整員の２名がソンラ市に滞在し（但しリーダーはシャトル型派遣）、短期専門家として日本の３大学から先生が派遣されました。

約4.5年間の協力期間が終了するのに当たり、教育、研究、貢献の成果のうち貢献についてはまだ十分な成果が出ていないことが評価で指摘されました。そこでプロジェクト延長を要請しましたが、ベトナム側の教育に係る政策が変わり、アジアにおけるトップ100に入る大学の育成を重視することになったため、地方における大学についてのODA協力は除外されることになりました。

写真４．TBU新校舎正門から

そのために、この残された「貢献」に対する活動を行うために、草の根技術協力で実施することでタイバック大学とリーダーの所属するNPO-IFPaTで実施する案が作成されました。ここでの貢献とは大学の成果が社会に活かされることであります。この草の根技術協力事業は地域活性枠のためソンラ省と笠間市との地域活性化を図る案件として提案し予算を申請し受注することが出来ました。これによりタム村、タイフン村の２村における農村開発として農業生産の付加価値化における野菜栽培が開始されました。活動はTBUの先生方の指導により農家がネットハウスを利用して減農薬野菜栽培を実施することでした。 また、タロイモ、サツマイモの栽培を行っていたタイフン村でこのイモの特産化を行い、付加価値化を行うことでした。この結果、減農薬栽培の野菜生産とイモの特産化についてどうにか3年で技術面

写真５．草の根フェーズ１で作成された地元の竹を使ったネットハウス

写真６．草の根フェース１で開設されたTBU大学内の直売場

図２
ンビ

での体制は出来上がりました。しかし販売、消費において限界があることが判明した。販売量、生産の季節性の振れなどから、都市の市場集荷には一農村では対応できないということでした。そこで、タイバック大学も含めたプロジェクト実施メンバーで協議して村での直売のシステムを取り入れた農村開発を行うプロジェクトにしてはどうかということになりました。 そのため

写真７． ボー村の文化観光センターの野菜直売所

にプロジェクトで農業生産物の販売の拡大を行うためにアグルツーリズムを取り入れて来村者を対象に販売する直売システムの導入を目的とした事業を行うことにしました。これが現在進めているフェーズ２の草の根技術協力事業です。これらの活動を通してタイバック大学の先生と共に実施してきたので、先生方にとっては大きな農業・農村開発の経験を得ることが出来た

写真８． **TBU**農林学部の先生方が各研究課題に取り組んで編集した８冊の出版物

と思っています。この期間における、タイバック大学の先生方も経験を積んで、学位を取得したり、海外に留学したりして能力が向上しています。農林学部でベトナム国内博士号の取得者が5名、海外の博士号取得者（韓国）１名、日本の大学（九州大学）に留学している先生１名の教員育成強化の実績を得ることが出来ました。

このように大学での活動を通して先生方の能力向上に貢献したことも受章の選考で認められたものと思います。タイバック大学での活動が先生方に好影響を与えたことをうれしく思っています。この賞についてはハノイの大学からの推薦で受賞される場合が多く、地方大学のタイバック大学からの推薦で受賞できたことは初めてのケースで、大変栄光なことと思っています。そして何よりも大きな力は先生方との信頼の絆が強まったことである思っています。さらにベトナムのタイバック（北西地域）中山間地域における教育、研究、社会貢献の課題にタイバック大学の先生が取り組んでいければと思っています。私個人としましては12年に渡る成果がやっと見えてきたという思いで、さらなる大学の飛躍を期待したいと思います。

写真９． **TBU**（タイバック）大学の先生方と**IFPaT**（イフパット）関係者と**TBU**キャンパスにて記念撮影

私と教育訓練省大臣授与 教育功労賞

会長　櫻井文海

NPO法人イフパットの専門家（プロジェクトリーダー）として、私は 2015 年から 2023年まで、タイバック大学の講師陣及びソンラ省の人民委員会と協力して、地元の少数民族の人々の生活を支援し、人々の能力を向上させるプロジェクトに参加してきました。実施された二つプロジェクト活動を私なりにまとめてみます。

（１）プロジェクト「**中山間地域における農業**

活性化による農家生計向上事業」。期間は2016年～2018年（2015年～2016年は事前調査と計画策定、カンターパートはタイバック大学農学部講師陣）

（２）プロジェクト「**中山間地域の少数民族農村におけるアグリツーリズムを導入した生計向上モデル事業**」。 期間は2020年～2024年（2018年～2020年は事前調査と計画策定、カンターパートはソンラ省の農業農村開発局、文化スポーツ観光局、ソンラ市人民委員会、そしてタイバック大学の計４機関で構成される事業管理委員会(ATPU)）

2015年から現在までの成果は次の通りです。

1. プロジェクト「**中山間地域における農業活性化による農家生計向上事業**」：

このプロジェクトは、トゥアンチャウ地区ムオイノイコミューンの**タイフン村**とソンラ市チェンシン区**タム村**の30世帯が、地元の農業資源を活用することで収入を向上できるよう支援しました。

タイフン村の12世帯を対象に、サツマイモとタロイモの安全安心な作物生産方法を支援し、付加価値をつけることで収入を増やすよう指導しました。具体的には有機肥料の使用、プラスチックマルチの使用、化学肥料の削減、生物的害虫駆除対策です。

タム村の18世帯に対しては、同様に安全安心な野菜生産のために有機堆肥の使用、保護栽培（ネットハウス、プラスチックマルチ、トンネル）、化学肥料や農薬の使用量の削減などの支援を行いました。

また、**タイバック大学**の学生に対しての支援も行われました。プロジェクト活動をテーマとして13人の学生が卒業論文を作成、実験生物学を専攻する学生1名が修士論文を執筆し、4グループの学生がプロジェクトの活動を通じ学部レベルで科学研究を実施しました。また、大学講師の1名が学術論文を完成することができました。

2. プロジェクト「**中山間地域の少数民族農村におけるアグリツーリズムを導入した生計向上モデル事業**」：

(1)各種研修コースの実施：2021年：30の農家を対象に安全な果物と野菜の生産に関する研修クラスを開催する。 2022 年: 77 名の農民が参加する 以下の4 回の研修クラスを開催する。① ホームステイとビジネスのための花の植え方と手入れのテクニックに関するクラス。 ② 消費および販売の基準と品質を確保するために果樹園を改修および管理技術に関するトレーニングクラス。 ③ 協同組合法、組合と生産物販売における協同組合の役割に関するクラス。 ④ 飼育ケージの構築とスッポンの飼育技術に関するクラス。

(2)スタディーツアーの開催：① ライチャウ省フォントー地区シン・スオイホー村のシン・スオイホー村でコミュニティ観光に関するスタディーツアーを開催。対象農民やプロジェクト管理委員会委員ら12人が参加、② ソンラ省モクチャウとヴァンホー地区で農業観光の現場を体験。対象農民とプロジェクト管理委員会委員、計17名が参加。） ③ 茨城県笠間市で「農業観光」に関する14日間の研修コースを実施。村管理委員会と住民6名が参加。

NPO法人イフパットの会長として、また、個人的貢献として、私はベトナムと日本の関係を深めるため、今までベトナムの地域発展を支援するフィールドプログラムやプロジェクトを通じて両国間の協力活動を促進するよう努めてきました。 特に、日本政府の援助で実施された今回の2つのプロジェクトを運営するにあたり、割り当てられたすべての組織的任務を問題なく完了するよう努力し、同時にベトナムの発展におけるJICA、NPO法人イフパット、そして茨城県笠間市の役割を強調し日本とベトナムの強い関係を促進するよう努力してきました。

今回の教育功労記念賞の受賞は、ソンラ省プロジェクトマネジメントユニット（ATPU）のスタッフ及びタイバック大学の教員らの協力による過去フェーズ１JICA草の根技術協力プロジェクトの成功及び進行中フェーズ２JICA草の根技術協力プロジェクトの活動の良好な進展が証明されたものですが、同時にNPO法人イフパット会員の皆様、特に事務局スタッフの協力と支援も忘れてはなりません。

皆様のご支援と技術サポートに心より感謝申し上げます。

ソンラ市、ボー村、プロジェクト活動？点描

ソンラ省人民委員会新庁舎

人民委員会本部前の整備された公園

専門家とカウンターパート機関との打合わせ

プロジェクトで整備したネットハウスのトマト栽培

ボー村にできた新しい民宿施設

タイ族の伝統的踊りを一緒に楽しむ

ボカシ肥料作り実習を終えて

着任のご挨拶

事務局長　石上俊雄

私は昨年12月半ばから、浅野事務局長の後任として着任した石上と申します。元JICA職員で、2019年に定年退職して、その後3年間JICA筑波センターでの再任用期間が終了し、2年間インターバルがありました。この期間中は、自由時間が増えたので、単車で寝袋を持ってツーリングすることも考えましたが、いろんな経緯があり、入管施設に収容中や仮放免中の外国籍の方々の支援に関わるようになりました。この度、つくば在住で、元JICA職員として、研修員受入れなど国際協力の経験があるということからか、声をかけてくださり、イフパットとつながりました。私自身はこれまでの国際協力の経験は主に青年海外協力隊の支援活動と研修員受入れを中心とした事業で、在外はケニアとポーランドに駐在しました。また、JICA筑波にはのべ3回計9年間、勤務しました。一度目の勤務は2001年から3年間でしたが、その時につくばが気に入って、そのまま今日まで定住しています。

私がつくばを気に入ったのには理由があります。私は1978年に筑波大に入学したのですが、当時はまさに研究学園都市の建設途上でした。つくばの印象は荒涼とした原野の面影が色濃く、風が吹くと関東ローム層の赤土が舞い上がる殺風景なものでした。イフパットの近くの国道408号線も東大通、西大通にも、樹木があった記憶がなく、オーバーに言えば、道から地平線が見えるような印象でした。1979年頃に、夏休みのバイトで1か月間、友人と一緒にイフパットからも近い畜産試験場（現在は農研機構畜産部門）の建設現場の飯場に寝泊まりして、ペンキ塗りのアルバイトをしたことがありました。おそらく同じ頃に、JICA筑波も建設していたのだと思います。それが、大学を卒業してほぼ20年ぶりに、JICA筑波に配属となって、つくばを再訪すると、大通りには美しい街路樹が延々と聳え、住宅が増え、荒涼というよりは、むしろ緑豊かなゆったりとした潤いのある町に変貌していました。この意外でうれしいギャップに感激して、家内と相談して、つくばに家を建てることとしたのです。

さて、私がのべ3回9年間勤務したJICA筑波では、たくさんの出会いと思い出があります。とりわけJICA筑波の宝物だと思うのは、野菜実習棟に掲げられている歴代の野菜コースの研修員と日本人

写真１．１９６９年第１回野菜コース

写真２．野菜実習棟の写真群

スタッフの集合写真です。1969年の第1回野菜コースの内原国際農業研修センター時代から直近の2023年までの54年間の野菜コースの写真が１年も途切れることなく、廊下に掲示されています。これは、内原、つくば、つまり茨城の地で、野菜栽培を学んだアジア、アフリカ、中南米、様々な国籍の研修員たちのネットワークであり、また歴代の研修担当者たちが、連綿と研修コースを大切に引き継いできたことの証しでもあります。このような50年以上も途切れることなく、同じ研修分野の写真を１か所に掲示しているところは、JICA本部やどのJICAセンターでも見たことがありません。そして、この写真群は、そのまま日本の国際協力の歴史を語ってもいると思うのです。日本の政府ベースの最も初期の研修員受入れとして、1958年にイランから9名の稲作分野の研修員受入れがあったと記録されていますが、その研修場所は内原でした。その後、JICAの源流の一つであるアジア協会が研修事業を実施するため、1961年に茨城県国際農業研修会館を設立し、後年、アジア協会が母体となった海外技術協力事業団（OTCA）の内原国際農業研修センターへと引き継がれていきます。そして、1980年代初頭の筑波研究学園都市の形成の中で、研究学園都市の各研究所が持っている技術と経験を開発途上国に伝えるために1980年に筑波インターナショナルセンターが設立され、翌年、同センターに隣接する形で内原から移転して筑波国際農業研修センターが開設されます。上記の野菜実習棟の写真のキャプションも、1980年までは、内原と書いてありますが、1981年からは筑波に変わっています。つくばの地でなぜ研修事業を今日まで展開しているのか、その理由と歴史を野菜実習棟の写真群は物語っています。

そして、イフパットは、日本の研修事業の草分けである内原とのつながりが原点であると思うのです。イフパットは、2005年に辻本壽之さんが中心となって創設されたと存じます。当時、辻本さんをはじめ、かつて内原国際農業研修センターで、直営で手作りの研修員受け入れを行っていた方々が、長年培ってきた国際協力の経験を活かして、途上国の小規模農家のために、イフパットを立ち上げたと聞き及んでおります。この原点がイフパットの柱であり、その一端に及ばずながら関わることになったことに定年後の邂逅として、出会いの妙を覚えています。現在、イフパットは歴史ある農業機械分野の研修コースとともに、生活改善や栄養改善分野の研修コースや草の根技術協力で、青年海外協力隊でコミュニティ開発の経験を持つ協力隊OVであるイフパット役職員の皆さんが活躍されています。内原時代からの国際協力の先達と私を含めその後進が世代を超えて国際協力にともに携わっていることに、この地での「持続する情熱」を感じております。どうぞ、これからよろしくお願いいたします。

NPO便り第34号に寄せて

編集文責：永井　和夫

NPO法人イフパットは2005年11月に設立されました。今年で19年目を迎えます。当初、JICAの帰国研修員と協力して農業・農村開発の国際セミナーを東南アジア各国で開催してきました。その後JICA研修コースの受託、専門家の派遣、そして草の根技術協力と活動の幅を広げてきました。

その中、2011年からJICAの技術協力プロジェクト「持続可能な農村開発のためのタイバック大学機能強化」のリーダーとなった当NPOの西村理事は桜井理事（現会長）と協力し、タイバック大学の自律的発展を支援すべく2期にわたり草の根技術協力継続し、足掛け１３年を経て教育訓練省から表彰されました。何はともあれ、継続は力です。ご苦労様。おめでとうございます。

石上新事務局長に着任の挨拶を書いていただきました。JICA職員として9年間のJICA筑波勤務経験をお持ちとのこと。安心して事務方の要をお任せできるとホッとしています。イフパットのこれから、よろしく願います。

「イフパットだより」に関する照会・連絡先
NPO法人国際農民参加型技術ネットワーク（イフパット）
〒300-1241 茨城県つくば市牧園5-13-203
TEL：029-875-4771　E-mail: info@npoifpat.com
ホームページ:http://npoifpat.com/